

「もったいない」こそ 誇るべき美德です

地球温暖化は、人類の生存にかかわる重大な問題であると同時に、私たちの、今の生活様式の見直しを問われている問題でもあります。今年からの5年間で、日本は温室効果ガス排出量の平均を、基準年（1990年）排出量と比べて6%削減することが京都議定書により義務付けられており、まさに今年は、私たち1人ひとりが環境配慮への取り組みをスタートさせる年であります。

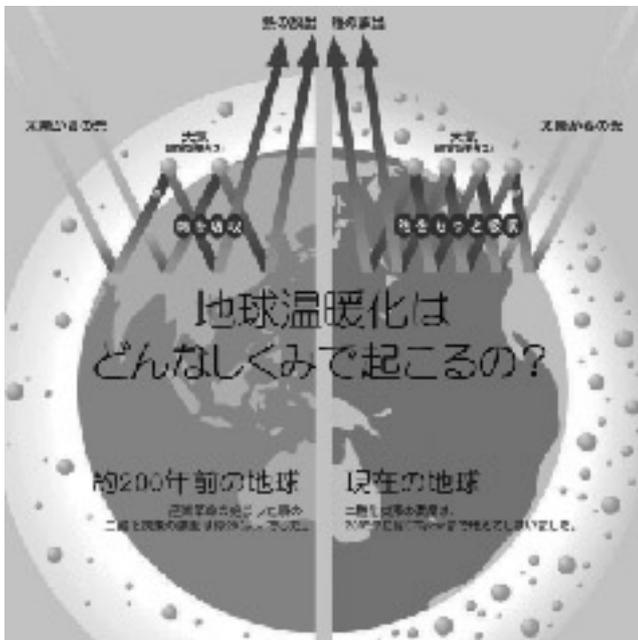
私たちがほんの少し生活様式の方角を変えるだけで、例えば利用している「モノ」について「もったいない」の気持ちを持つだけで、地球温暖化防止に大きく貢献していくことができます。

地球温暖化防止への取り組みで世界全体が一つにまとまりつつある今こそ、私たち1人ひとりの「もったいない」の心がけと行動が、大きな変化につながるのです。

地球温暖化の原因は…

先月号でお知らせしたように、現在、地球はどんどん暖かくなっています。

地球温暖化は、左の図のように大気中の二酸化炭素などの温室効果ガスと呼ばれるガスが一定以上増え、地球から宇宙空間に放出される熱が一定以上増えることで起きています。ちょうど太陽からもらった熱が、地球の大気の中にこもったまま「温室」のようにになって、地球の平均気温を上昇させています。



出典：全国地球温暖化防止活動推進センター

その結果、大気のバランスが崩れ、地球温暖化がどんどん進んでいます。20世紀最後の1990年代は、過去1000年間で最も平均気温が高い10年となり、世界の平均気温は1906年から2005年の100年間で^{0.74}も上昇してしまいました。日本の気温は1度上昇しました。

2050年に二酸化炭素半減へ

このまま化石エネルギーに依存した高い経済成長を実現する社会へ突き進むと、21世紀末の二酸化炭素の濃度は、産業革命前の2倍から3倍以上の540~970ppmへ増加すると予測されています。二酸化炭素濃度の上昇を抑えるためには、人間の活動から排出される人為排出量と、森林や海洋などの自然吸収量のバランスをとる必要がありますが、現状は人為排出量が自然吸収量を倍以上上回っています。

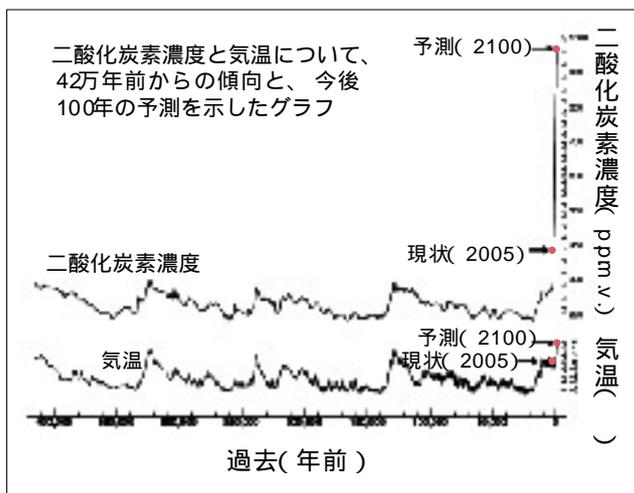
国連の気候変動に関する政府間パネル報告書では、温暖化の影響を小さくするためには、世界の温室効果ガス排出量を2015年までに減少に転じさせ、2050年には現状の半分以下にする必要があると指摘しています。

京都議定書は、世界の国々が参加して地球温暖化防止の方角を決定したものです。今年からの5年間で、温室効果ガス排出量の平均を基準年（1990年）排出量と比べて6%削減することが義務付けられています。

二酸化炭素は、産業革命が始まった18世紀半ばから、石灰や石油など化石燃料の燃焼により、大量に大気中に排出されるようになりました。

核兵器と同じように人類存続の脅威となっている地球温暖化を防ぐために、今、世界全体がまとまりつつあります。

過去42万年前からの二酸化炭素濃度と気温のグラフ



出典：環境省「地球温暖化の影響」

南極の氷に穴を開け、氷の円柱を取り出した「氷床コア」と呼ばれる氷の柱を科学的に分析することにより、一年一年と時間をさかのぼり、大気中の二酸化炭素濃度の量や気温を正確に測ることが出来ます。過去42万年間に現在の二酸化炭素濃度を越えたことはなく、過去2000万年までさかのぼっても、越えたことはなかった可能性が高いのです。

「もったいない」の心を

女性環境保護活動家でアフリカ人女性初のノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マタイさんは、3年前に来日した際に、日本語の「もったいない」という言葉に、3R活動『消費削減(リデュース)』、『再利用(リユース)』、『資源再利用(リサイクル)』の精神が込められていることに深い感銘を受けたそうです。私たちは、経済的豊かさを達成することを目標とし、使いやすい化石エネルギーの力を借りて高度な産業社会を作り上げ、物質的に豊かで快適な生活様式を構築してきました。この過程で、日本の美徳の神髄ともいえる「もったいない」が急速に失われてしまいました。



大量処分から有効利用へ

外国人によって「もったいない」が高く評価されるのも妙な話ですが、大量消費・大量廃棄社会から循環型社会への転換には、この日本文化の誇るべき

美徳「もったいない」をあらためて呼び起こさなければならぬと思います。



次世代にリレーするために

私たちは、世界の平均気温や二酸化炭素濃度が急激に上昇していることに無関心でいたり、「地球温暖化はわかるけど自分の生活様式は変えたくない」と言っているのは、この危機を乗り切ることができません。このままでは、私たちは最悪のシナリオに向かって歩を進めることになるからです。

私たちは地球を存続させるための生き方に転換していくことが求められています。

難しいことはありません。

子や孫の世代のためにも、私たちは、今、立ち上がらねばならないのです。

(文責 三豊市長 横山忠始)

今回は、「地球温暖化に対する私たちの関心度」について取り上げます。